

ウガンダゲストハウス〔中間編〕

土地購入と人脈の確保を終えて日本に帰国してきた僕等。

2月までの出発までにやる事があった。

ビジネスビザの取得<森川編>

ゲストハウスを建設する、というのはビジネスなのだろうか。念のため、僕等はウガンダのビジネスビザを取得することにした。

基本的にウガンダのビザを取得する方法は二つ。一つは空港や国境などで取得する。もう一つはウガンダ大使館に行って取得する。(日本にあるウガンダ大使館でもアフリカ周辺国のウガンダ大使館でも)ちなみに国境でビザを取得する場合、学割が効いて20ドルになる。大使館で取得する場合は、50ドルだ。取得する場所によってビザの値段が違ったり、また国によってはビザの形が違ったりする。ウガンダの隣国ルワンダでは、国境では取得するとしょぼいスタンプビザしかくれないのに、アフリカ隣国(ウガンダだけ)にあるルワンダ大使館で取得すると、マウンテンゴリラのラミネートが入ったシールビザをもらえる。(これはかわいい)

ともあれ、今回はビジネスビザだったこともあり、事前に日本の目黒にあるウガンダ大使館に行って取得することにした。さらに、何か役に立てばいいかなと思い、日本駐在ウガンダ大使のレター(推薦状)をもらってみることにした。電話で確認したところ、ビジネスビザは 円で、発行に一日かかる。また、レターは 円で発行してくれるというっている。ちょっと待て、なぜレターがほしいかとか理由を聞かなくてもいいのだろうか。そんなささやかな疑問を押さえつつ、まあもらえるならいいかとウガンダ大使館に行ってみた。当時の駐日ウガンダ大使の名前は、ミスターグマ。挨拶がてら、ひよっとしたら通じるかも、と思って言ってみた。「アガンディー!(元気?)」

「ニジ(元気だよ)」何事もなかったかのように普通に返答がきた。

まずは簡単に自己紹介、そして、僕たちがいまウガンダでやろうとしていることを簡単に説明し、エッセンスを要約した企画書を渡した。するとやけにあっさり、分かった、ビジネスビザをあげるからパスポートを一日預けてくれ。レターも発行しよう、それも同じく一日かかるから明日きてくれと言われた。

本当にあれだけでビジネスビザと大使館のレターがもらえるのだろうか。かなり不安だったが、翌日何の問題もなくビザとレターをゲットすることができた。このときはなんに使うのかよく分からなかったレターが、後でとても役に立つとは思ってもいなかった。

宣伝の旅<豊田編>

ウガンダゲストハウスをより多くの日本人に宣伝したい。

その思いから僕は自ら動く広告塔をかってでた。

その方法はただ一つ世界中の日本人宿に行って直接伝えるとともに各宿にある情報ノートに書き写すのである。

情報ノートとは初めてその各地に訪れた日本人が交通手段、銀行、観光スポット、おいしい食べ物屋等様々な情報がのっている伝言ノートだ。

ガイドブックなどなくてもこの情報ノートを駆使すれば現地のリアルな最新情報が得られるのだ。僕等多くの旅人がアフリカの事前に行くであろう南米をターゲットにし日本を飛び立った。

<チリ（ビーニャデルマル）>

チリに着くと僕はすぐさまビーニャデルマルに向かった。

この街には有名な日本人宿がある。僕はすぐさまその日本人宿に向かった。

もちろんウガンダゲストハウスの宣伝をするためだ。

この街には僕が一年前に出場したスポールブール世界選手権のU18世界選手権が開催されている。ある情報はこの街で開催されているという事だけである。

僕は一度も勉強した事もないスペイン語を駆使して街中のスタジアムを探した。

しかしなかなか見つからない。とうとう疲れて僕はバスの中で眠っていた、そしてふと起きて窓の外を見るとスポールブールU18世界選手権の旗が道路沿いに立っていたのだ。

急いでバスを降りてその旗をもう一度よく見ている。確かにこの場所で世界選手権が開催されているのは間違いない。

そして奇跡が起きた。僕の目の前をアルジェリアの監督と選手が横切ったのである。

僕はとっさにスペイン語で話しかけたが彼らはアラビア語とフランス語しか話せないため僕を無視して行ってしまった。

しかし僕は彼らの後を追って競技場に辿り着いた。

その日から僕の生活が一変した。

今まで1泊300円の安い日本人宿に泊まっていたのが、1泊120ドルの5星ホテルになり、今まで現地の安い食事を食べていたが、朝、昼、晩、深夜と最高級のチリ料理がでてくるようになった。すべてスポールブールの理事長がはるか遠くから来た日本人選手を最高級の待遇で接待してくれたのである。

大会日程中は送迎のバスがホテルから会場まで案内してくれる。食事も用意され言うことなしの幸せな日々が続いた。そして大会日程が全て終わり最後のパーティーが最高の形で幕を閉じた。仲間との再会、そして新たなる挑戦への近い僕は感動に包まれていた。

感動は忘れたところにやってくる。

何かを忘れていた僕ははっと我にかえた。今回の目的であるウガンダゲストハウスの宣伝をまだしていなかった。

しかし無情にもその事に気付いたのはサンティアゴ行きのバスの中だった。

<チリ（サンティアゴ）>

サンティアゴにも有名な日本人宿がある。僕は今度こそは失敗しないぞと、到着早々日本人宿の情報ノートにウガンダゲストハウス情報を書き込む。

サンティアゴは大都会だ。大都会に共通する他人への関心のなさ、外国人への関心のなさ、なにもしないと誰とも話さないでその日が終わってしまう。

僕はせっかくチリに来たのだから現地の人にもウガンダゲストハウスを伝えようと決めた。しかし、チリに来ての現地人とのまともな会話は下着カフェに言った時の店員さんとの営業トークだけだ。このサンティアゴにはマラバリスタ（ジャグラー）が多い。車が信号待ちで青になるのを待っていると 車の前にヒョッコと出てきて、ボール7個でお手玉しながら一回転、しかも3Mの一輪車の上。そして青になる瞬間に車に近づきお金を頂くという職業だ。大道芸をやっていた僕も早速ボール3つで交差点の真ん中へ、ボールを何回も落しながら信号が青に変わる寸前に運転手にお金を貰いに行く。3時間これを繰り返えし10ドルをゲットした。すると自然と仲間ができてくる。

『俺の彼女は日本人・・・』 彼はどうやらそう言いたいらしい。

彼の名はアレ、鋭い剣を3本持ち服には血がついている。そしてその3本を同時に投げ、自分は一回転し落ちてくる瞬間に手を股の下に入れて背面キャッチというすごい技で一回のショーで10ドル稼いでいく。一回のショーが3分くらいなので単純に僕の60倍の稼ぎだ。しかも彼は道行く女性に声をかけて行っている。

大きな声で 『リコー（かわいい）』と呼びとめたり、走って女性に声をかけては断られている。この男について行けば何か学べるのではないのか？僕の体がそう反応した。

アレと深夜0時公園で話しをしていると一人の女性が近づいてきた。

彼女の名前はカトリーナ、20歳。どうやらタバコの火を貸して欲しいらしい。

そして俺が日本人だと分かると空手の構えをしてきた。

彼女は空手を習っているらしい。日本の事もマンガや歌を中心に俺より知っていた・・・。

アレと彼女が薬局に薬を買いに行くと言って僕の元から去っていった。

『コンドームかぁ？』と皮肉るカトリーナ。どうやらちょっと酔っ払っているらしい。

カトリーナと一緒にいた友達もいつの間にか消えていた。

私の腕に日本語で私の名前を書いてとスキンシップを図ってくる。

カトリーナと片仮名で彼女の腕に書いた。かなりよろこぶ彼女。

『もう一度、もう一度』と俺の手を何度も触ってくる。

言葉は通じなくても心は通じるとよく言ったものだ。

今日はアレと友達になったばかりだし、今日は連絡先の交換だけにしておこう。と彼女と涙の別れ。

この時俺は2つのミスを犯した。

- 1、電話で簡単に連絡できると思っていたこと。
- 2、彼女が予想以上に酔っ払っていた事。

次の日俺は彼女に電話をしようとした。俺が一日使えるお金が1000ペソ。

そして電話代はなんと100ペソ。失敗はけして許されない。俺は500ペソを電話代と決めてまず100ペソを入れた。

何度ダイヤルしても通じない…… 手に汗にぎる俺、 なぜ……

そして信じられない事が 受話器を一回置いて再リトライしようとしたがなんとお金が返ってこない。 日本だと相手がでないと料金はかからない。電話まで俺の敵なのか。

次の100ペソを入れてもやっぱりかからない。もしかして外国人は使えないのか？

でもそれはどうやって見分けるんだ。ここで神がかりな情報を『地球の歩き方』からゲット。なんと携帯電話は200ペソかららしい。もうこわいものは何もない。カモン カトリーナ。そして彼女を呼び出すコールになる。

カトリーナ 『八口。』

そしていきなり遊ぶ約束をする。 世間話をするコミュニケーションがないからだ。

じゃー今日、この前あった場所に8時ね。と約束。そして電話を切ろうとすると彼女から信じられない言葉が……

『ポルケ？』(WHY?) 彼女が『なぜ？私たちは会うの？』と問い掛けてきたのだ。

いきなりの質問に俺は焦る。俺はただウガンダゲストハウスの素晴らしさを伝えたいだけなのに。しかし何て答えたらいいのだ。黙るのも変だ。

とっさにでた答えが、

キエロ アプレnderール エス エスパニオール。

『スペイン語を勉強したい。』

ノー と彼女が言った瞬間電話が切れた。もう今日の生活費1000ペソを全て使ってしまった。今日も食事抜きか……。

その日俺はサンティアゴを出る決意をしたのであった。

<アルゼンチン>

僕は今アルゼンチンのブエノスアイレスにいる。

ここにも多くの日本人宿があり、多くの日本人がいる街だ。

今僕はアルゼンチンの首都ブエノスアイレスにいる。

今度こそ現地の人にウガンダゲストハウスのよさを伝えよう。ツーリストインフォメーション、道端、ファッションビルディングで人が集まる場所を聞く。受付で『俺は現地の人と会話がしたいのです。どこでできるのですか？』

とスペイン語で聞くと、どうやらその受付のお姉さんに告白しているように聞こえたらしい。他の受付の人たちが紙にハートのマークを書いて僕をからかう。

1日中歩いた結果ブエノスアイレスには深夜になると若者が集まるスポットがあるらしい。そして深夜0時すぎ僕はそのスポットに向った。

ホテルをでるとすぐに、ゴミを漁る浮浪者、ナイフをちらつかせる少年、雄たけびを上げる数匹の犬達が街中を網羅していた。

ホテルに戻ったほうがいいのか？それとも現地の人にウガンダゲストハウスを伝える旅にでた方がいいのか。迷った結果答えがでた。

動けば何かがある。僕は誰もいない道を歩き始めた。

すると海の方から大勢の人たちが歩いてきた。どうやら音楽コンサートがあったらしい。チャンスだ。綺麗な夜景を歩いていると女性が3人座ってお酒を飲んでいるではないか。まさにピンチの後にチャンスあり。写真とって下さいと、一緒に撮りましょう。作戦ですぐに打ち解ける。その3人の中にマリアがいた。23歳の医学生。医学生といっても人間ではなく動物専門だ。マリアと俺の話はもりあがる。ウガンダゲストハウスの事を伝えるのははすっかり忘れていて、いままでどんな国に行ったのか？スペイン語でこの言葉はなんて言うのか？日本語では？そんなたわいもない話が続く。

1時間後、彼女たちのバスがなくなってしまうとうので帰路につくことになった。

連絡先は聞いたが電話ではなく口頭で約束するのが一番だという事はチリで学んだ。

俺はマリアに言った。

『俺は(きみの)すべてを知りたいんだ。』

『えっ なにを？』

ここで少し沈黙が流れる。いきなり率直に言うのも照れるし、ひかれると思い俺は、

『アルゼンチン』と答えてしまった。

彼女はこう答えた。

『アルゼンチンは広い、私でもすべては分からないわ。』

仰るとおりです。僕は次の広告地ブラジルへ向かった。

< ブラジル >

僕はブラジルのサンパウロにいる。あるインターネットショップで森川君からのメールを見る。『宣伝活動は順調ですか？』

このメールを見て我に返る。今までともに日本人宿にいる日本人と会話をしてこなかった反省点を生かしサンパウロでは日本人と共に行動する事を決めた。

サンパウロの日本人宿にはいろいろな方がいた。僕は彼らにウガンダゲストハウスの件を話すと多くの人が宣伝を広告してくれると言ってくれた。これからアジアに行く人、アメリカに行く人、ヨーロッパに行く人、それぞれの方に宣伝カードを渡し広告宣伝活動をアウトソーシングした。そうか最初からこうすればよかったのか。

この日この旅の僕の目的は達成した。

この日本人宿には、サンパウロ新聞の切り抜きが張ってあり、森川君の記事が載っていた。かつて森川君が世界中で大道芸をしながら旅行をしている日本人としてサンパウロ新聞に取材をうけていた。

その時の状況を森川君がこう語っていた。

取材日はどうしたものかクリスマスイブ。

ブラジルのクリスマスは、カップルとデートっていうよりも、家族一緒に過ごすっていうのが主流だ。せっかくにイブなのに、広場にいるのは浮浪者だけ・・・

記者も来てしまったのでしょうがないから、大道芸のショーを始める。当然見ている人は浮浪者だけ。浮浪者はそんなまったく大道芸を見てなで、寝てるだけ。金もまったく入らない。

どうやら新聞記事とは裏腹に散々なショーだったらしい・・・

こうして無事宣伝広告活動を終わらした僕はこの後、ボリビア、ペルー、カナダと訪れて観光を満喫したのであった。

<チャーチルの言葉>

ウガンダ共和国

アフリカのほかのどの地でも、これほど少ないお金で

これほど素晴らしい結果がこれほど速く実現されることはない。

ウガンダは端から端まで、一つの美しい庭である。

そこでは人々の主要な食べ物は、労なくして育つ。

まるで地上の楽園のようではないか。

それがアフリカの真珠である。

ウィンストン・チャーチル脚「私のアフリカ紀行」より